
僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ……

綺雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ……

【Nコード】

N7479Y

【作者名】

綺雨

【あらすじ】

高町家の次男として生を受けた主人公。妙な前世の記憶を持ちつつも平穩に生きる彼の前に妙なモノが現れる。未来から来たという『彼女』だが、この世界は『彼女』の知る世界とはかなり違うよう……

基本ほのぼの、たまにシリアスっぽい、きつとコメディなお話。

プロローグ（前書き）

初投稿。更新は不定期です。

プロローグ

やはり私のマスターはあの人だけ、か。

最愛のマスターとの別れから数十年。宙空に浮かびながら『彼女は独りごちた。

幾つもの研究所を転々とし、幾人もの人間が『彼女』を使おうとした。

けれど。

機能ばかりが増えていき、進化し続けた『彼女』の前に、しかし担い手は一向に現れなかった。

その性能の高さゆえに眠りにつくことすら許されず、ただ待ち続けるしかなかった『彼女』。

だけどそれももう終わり。

感情すら持った『彼女』は歓喜に打ち震えていた。

あの役立たず共も今回はかりは褒めてやってもいいかもしれない。時間遡行。

本来それは不可能だとされてきた。

しかし先日その概念が覆されたのだ。

といつてもたどり着く先は並行世界であり、完全な時間遡行が不可能なことには変わらない。

おまけに開けられる『穴』はせいぜいが拳大ほど。時間旅行など夢のまた夢。

だが『彼女』にはそれで十分。
ブウン！！

システムをハッキングし、実験装置を起動させる。

軽い次元震と共に開き始める『穴』。

研究員たちが気づいて慌てますが、もう遅い。

『私はマスターに会いにいきます。御機嫌よう、間抜けさんたち』

上機嫌な声を最後に『彼女』は姿を消した。

『彼女』の名はレイジングハート。かつてのエースオブエースの愛機。

それは史上初のデバイスの次元犯罪者（？）誕生の瞬間だった。

一章

「はい、じゃあここまでにしませう」

その言葉に合わせたかのように鐘が鳴る。

四時限目終了の合図。

昼休みだ。

途端、学校全体がざわめきだす。

いい加減慣れてもよさそうなのに。

どうにも懐かしく感じるその気配に、知らず顔を緩ませた。

私立聖祥大附属小学校。それがこの学校の名前。

地元では有名なお金持ち学校である。

ちなみにウチはただの喫茶店。お父さんたち超頑張った。

通い始めて一年以上経つが、本当に小学校か？ と言いたくなる設備にはいまだに驚かされる。

不満があるとしたら給食がないことと、制服のデザイン。

水兵服そのものなのだ。いっそ帽子も付けてくれないか、ってくらい。

女子の制服は凝ってるくせに。

愚痴を言っても仕方がないし、結構な学費が掛かってるからやる気もないけど。

それに。

「礼也！ 行くわよ！」

ここには親友もいる。

振り向いた先には僕の今生初めての友達の一入。

長く伸ばした髪は金系のように煌き、白人系の色素の薄い肌は滑らかでまるで白磁。幼いながらも愛らしく整った顔には、エメラルドを嵌め込んだが如き瞳が勝気な光を放っている。

我ながら身贋の入りまくった描写だと思うが、それを抜きにし

ても類稀な美少女だ。

アリサ・バニングス。

アメリカ人の実業家を父に持つ、正真正銘のお嬢さま。

中流以上の家庭の子女が揃うこの学校でもぶっちぎりのお金持ちなのだ。

どれくらいかって言うのと専属の執事が付くレベル。最初知った時は驚きを通り越して呆れてしまった。

そんな感じで育ちにはとんでもなく違いがあるものの、なんだかんだで二年付き合いが続いている。

「今日も屋上？」

檸檬色の弁当包みを取り出し聞いてみる。答えは分かっているけど。

「もちろん。よく晴れてるし、席とられないように急ぐわよ」

「はいはい」

この子と弁当を食べるようになってから、屋上でしか食べたことがない。雨の日は除く。

「相変わらずアンタの弁当って豪華よねえ」

女の子らしい小さ目の弁当箱に敷き詰められたご飯をばくつきながらアリサが呆れたような声を出す。

屋上にいくつも設置してあるベンチ。その一つに仲良く座って食事中。

「あはは。なんかいつも張り合っちゃってね。今日なんか早く目が覚めたから特に」

僕の手元には二つ弁当箱がある。二段の上下とかではない。単純に二人前。

理由は結構しょーもない。

「黒い方がアンタのだけ？ 桃子さんのは分かるけど、なんでアンタがそんなに料理できんのよ……」

「練習すれば誰でもできるって」

「できるかー！ とか叫んでるアリサは置いといて。」

お母さんと僕。実は二人で別々に作っているのだ。ちなみに黒い弁当箱が僕作。赤い弁当箱がお母さん作である。

お母さん、高町桃子はウチで経営している喫茶店『翠屋』のパティシエさん。お母さんのお菓子を求めて遠方からもお客さんが来るほどで、特にシュークリームは絶品だ。

お菓子作りが本業のお母さんだけど、店で出す軽食まで作るだけあつて料理の腕前も一流。

そんなお母さんが作ってくれるというのだから任せておけばいいのだけ。

店の準備もあるお母さんはすごく忙しいのだ。だから料理は得意な僕が自分で作ることにしたのである。

しかしそれで納得しないのがお母さん。

礼也のお弁当はお母さんが作るの！ とか言い出して。

それから何をどう間違つたのか、どっちが美味しくできるか勝負だ！ って謎の超展開になった。

そのせいで今では味はもちろん、栄養バランスに飾り付けまで凝りに凝つたトンデモ弁当ができるように。ただし二つ。カロリー計算してるの意味ないよね。まあ結構運動するからいいんだけど。

「今日はさすがにないから、ちよつとキツイかなあ」

「あ、そっか。そういえばさすがに休むのって初めて？」

「だね。あの娘、あれで意外と頑丈だし」

僕のもう一人の友達。月村すずか。

いつもは彼女とアリサに分けながら完食するのだが、今日は風邪でお休みらしい。

五時限目の体育はハードになりそうだ。

ちなみにアリサとすずかと僕で、いつも一緒に仲良しトリオ（他称）の完成である。

……というか僕の場合この二人しか友達いないし。

か、悲しくなんてないんだからね！？

『翠屋』で偶に給仕してるから通りすがりの人によく声かけても

らえるし！

お姉ちゃんの友達とはよく遊ぶし！

……あれは遊ばれてるのか。

顔はかわいいもんねえ。お母さんをそのまま子供にしたみたいな顔だし。

お母さんは美人だ。柔らかい茶色の髪は綺麗だし、十代といつても通じかねない若々しく優しげな美貌。日本人らしからぬ青い瞳だつて大好きだ。

自慢のお母さんではあるけど、自分がその美人さんとそっくりとなると微妙な気分になる。髪を短くしたら似合わすぎて、家族全員から禁止されたし。そりゃ丸刈りのお母さんとか見たくないよね。それ以来僕の髪は首にかかる程度になっている。

お兄ちゃんくらいとまでは言わないけど、もうちょっと男前に生まれなかった。

それはともかく。

「今日の放課後は空いてる？ 暇なら一緒にお見舞いに行こうよ」
友達が少ないとその分大事にできるよねっ！ 決して負け惜しみなんかじゃない。

「もちろん行くに決まってるでしょ。私だって心配なんだから」
さすが。やっぱりアリサは優しい娘。持つべきものは友、だね。

「よし。移動手段ゲット」

「待てコラ。私の目を見てもう一度言ってみなさい」

「アリサは今日も綺麗だね！」

……恥ずかしいからって無言で殴ることないと思うんだ。

二章

月村邸。

バニングス家の使用人である鮫島さんに送ってもらって、かなり早い時間に着いた。

どこのホテルかと言いたくなるこの洋館がすずかの家なのだ。

月村家はここ海鳴市のみならず、日本全体でも有数の名家だったりする。

「あ、ノエルさん。お久しぶりです」

鮫島さんから連絡がいつていたらしく、メイド長のノエルさんが出迎えてくれた。

フルネームはノエル・E・エアリヒカイト、だったか。

見た目二十台前半のいかにもできそうなクールビューティー。

前に聞いたが、アリサの憧れの女性の一人らしい。

クールなアリサ……ないな。

お嬢さまとしているいろいろと教養は身に付けているし、そう振舞うことはできるだろうが、基本的に彼女は感情家なのである。良くも悪くも。

まあ、今はすずかだ。

「すずかは大丈夫ですか？」

「はい。午後には良くなられて、今は……………読書をなさっております」

なんだその妙な間は。元気ならいいけど。

「そうですね。良かったね、アリサ」

長い廊下を歩きながら、さっきから全然しゃべらないアリサに振ってみる。

なんかやけに大人しい。

ノエルさんが出てきたあたりから、それはもう借りてきた猫のよう。

僕の後ろに隠れてなんかそわそわしてる。

……あれか？ いきなり好きな人が前に出てきて何言えばいいか分からないっ、とか？ アリサぐらいの歳だったら憧れと好きって区別付きづらいだろうし、ありえるよね！

ちよっと思いついてノエルさんにそっとう耳打ちする。

首を傾げながらも頷いてくれた。

「アリサ様」

「ひゃい!?!」

ビクウツ!! と飛び退るアリサ。なんかすごい反応。

「アリサ様は」今日も大変可愛らしいですね」

「!?!?!?!?!」

あれ、なんか怖がってる？ ちよっとう涙目だし。あ、あれか。幸せすぎて怖い、ってやつ。

合ってるかどうかはともかく涙目のアリサが可愛すぎる。

ノエルさんは困ってるけど、もう少しこのままにしておこう。

忍び足ですずかの部屋を目指す。何度も来たので道はバッチリだ。後ろで礼也さま!?! とか悲鳴が聞こえるけど気にしない。

馬に蹴られたくないしね!

「すずかー、いる?」

無数に並ぶ扉の一つをノックする。

バタバタ! ゴソゴソ……ドシンッ! ドタバタ……

待つこと数十秒。

「れ、礼也君こんにちはっ!」

「……そこまであからさまに隠されるとすごい気になるなあ」
顔真っ赤だし。息荒いし。

「な、何のことかなっ!?!」

この娘なかつたことにする気だ……

仕方ない。僕も鬼じゃないし、またの機会にしてあげよう。忘れてはあげない。

とりあえずアリサにもしたし人物描写でもするか。

「紫色の綺麗な長い髪をした優しい女の子。目はアメジストみたいで大きくて可愛い。今は白い肌が紅潮しててちょっと色っぽい。白いカチューシャがトレードマーク。活発なアリサとは逆にお淑やかなお嬢さまで、今から大学の専攻まで考えてるすごい娘です」

「い、いきなり何言ってるの!？」

カ~~~~ッ！　とさらに顔を赤らめるわずか。なんか爆発しそう。

「いや〜今日ね、学校でお友達の紹介をしてみました！　っていうのがあったんだ。だからすかでもやってみた」

いきなりやらないでよお、ってまだ顔真っ赤。でも気は逸れたみたい。

「で、何隠したの？」

「それは……………っ！　い、言わないよっ!？」

む、残念。いけるかと思ったんだけど。

「もうっ。……………それより二人でお見舞いに来てくれたんだよね？」

アリサちゃんは？

「ああ、アリサならノエルさんと百合空間を展開」

「しておりませんので悪しからず」

「!?!」

どっから出てきたノエルさん。すずかが卒倒しそうになってるじゃないか。

「って、アリサはどうしたんです？」

「アリサ様ならもうすぐいらっしやいますよ」

つまり置いてきた、と。いつも完璧なメイドのノエルさんにしては珍しい。

すずかもそう思ったのかまた驚き顔になってる。

「それはともかく、礼也様。先程はよくも逃げてくださいましたね？」

……………状況把握。

要するにこのメイド様は僕に仕返しに来たわけだ。

くっ、僕は親友の恋路を応援しただけだというのに！ そりゃノエルさんがそっちの気がないのは知ってるけどさっ！

っつ、そんなこと言ってる場合じゃない。

「すずか！ お大事にね！ 僕はもう帰るから！」

「畏まりました。ではご案内いたします」

「速っ！？ って痛い痛い痛い！ 握力何キロあるの！？」

ノエルのキャラが違う、とか呟いてるすずかに恭しく一礼し、踵を返すノエルさん。

前にちよつと昔話したら急に遠慮がなくなつたんだよね、この人。それ自体はうれしいけど、とりあえず右手で拘束した僕の両手を離してくれないだろうか？ 骨が砕けそうなんだけど。

「っつて、待った！ そっち玄関じゃないって！ そっちにあるのはアナタの部屋ー！」
ばたん。

三章

今日はお父さんが監督をしている翠屋JFCの試合の日。
応援に来てただけだったけど、欠員があつたらしく急遽参加することになった。

「試合終了ー！　じゅ、12-0で翠屋JFCの勝利！」
……………どんまい。

「アンタ、相変わらず大人気ないわね」

喫茶『翠屋』のテラス席にて。

ジャージなんか持ってきてなかったから、普段着のままいつもの三人でお茶。

「いや、僕まだ子供じゃないか」

「そういう問題じゃないわよ」

六得点四アシストという華々しい活躍を見せた僕は、なぜかアリサに呆れられていた。

むー、頑張ったのに。

「だって、アリサとすずかが見てるんだから全力でやらないと」

これが、私の理由！

「そう言ってくれるのは嬉しいけどね。限度つてもんがあるでしょ」
「よ」

「そうだよお。相手チームの人たち、泣いてたよ？」

くっ、すずかまで。

「人は涙の数だけ強くなれるんだ」

「はいはい」

絶品のはずのフルーツケーキはなんだかしよっぱかった。

「今日はありがとなー！」

「おかげで助かったよ！」

打ち上げが終わり、サッカー少年たちがぞろぞろと帰りだす。看板娘（？）として見送る僕にかけられる暖かい言葉の数々。思わず胸がジーンとなった。

「やっぱ僕頑張ったよね!？」

「アリサたちとは大違いだ。さすがスポーツマン。」

一人ウンウンと頷いていると。

「そうだ。お礼にコレやるよ。ただの石だとは思っけど、キレイだろ?」

「確か今日のキーパー君だったはず。男の子に青い菱形の宝石みたいな石をもらった。」

「うん、確かに綺麗だね。」

でもなんかいやな予感がするんだけど。

「とりあえずお礼を言っただけで観察してみる。」

「ますます強くなるいやな予感。」

「僕のこれ、あんまり外れないんだよなあ。」

「……よし、埋めるか。」

「動かないで。」

家に帰り、貰った石を庭に埋めようとしてたらいきなり女の子にナイフを突き付けられた。

「……え?」

意味が分からん。っていつかどっから現れたこの娘。ウチの流派の神速どころじゃないぞ。あれも速いけど僕なら辛うじて知覚できるレベル。この娘は瞬間移動してきたようにしか見えん。

「それをどうするつもり?」

「それ、ってどれだ。」

「この石か?」

「ジェスチャーで尋ねるとコクンと頷く。」

「改めてみるとこの娘可愛いな。」

「年齢は同じくらいで中性的な顔立ち。アリサより色が薄い金髪を」

後ろで結んで、目の色はさすがに似てる。

無地の黒いTシャツにジーパンっていう飾り気のない服装だけど、雰囲気は華があって全然野暮ったく見えない。赤い宝玉が付いたネックレスがワンポイント、なんだろうか？

ってそうじゃなかった。

「どうするって……埋める？」

「……埋めるの？」

「うん」

「……なんで？」

「……なんとなく？」

「……そう、なんだ」

なんだこの会話。

この娘、この石が欲しいのか？

それなら刃物で脅したりしないで、素直に言って欲しいんだけど。

「これ、欲しいの？ だったら」

『マスター！ やつと会えました！』

あげるよ、と続けようとした言葉は第三者の声に遮られた。

『いやあ、性別が違ったので判断に時間がかかりましたが、間違いないです！ この泥棒猫もたまには役に立ちますね』

「ちょ、酷っ！？ って違う！ 何しゃべってるのさ！？」

『うるさいです。この方こそが私のマスターですよ？ 跪きなさい』

い

「なんで!？」

これは、この娘の胸元でピカピカ光ってるネックレスから声が出てるんだろうか？

新型携帯端末？ でもこの娘も驚いてるし……

「えーと、それは？」

わたわたししてる金髪っ娘に聞いてみる。

「あ、えっと、その、これは……」

『初めまして、マスター！ 私は貴方の、貴方だけのデバイスで

す！ 名前はレイジングハート。レイハとお呼びください！』

これが僕と、僕の生涯の相棒との出会いだっただ。

四章

「ロストロギアは、この付近にあるんだね」
夜。

喧騒も遠いビルの屋上に、一人の少女が佇んでいた。
街の明かりに照らされるその装いは異様と言える。

右手に斧らしきものを持ち、長いツインテールと共に靡いているのはマント。そして腰に布を巻いているとはいえ、レオタードのよ
うな黒衣。

変態とか言っちゃいけない。

「形態は青い宝石。一般呼称はジュエルシード」

呟く少女の瞳はどこまでも澄んでいて。

それでいてどこか寂しげだった。

「気を付けて、フェイト。ニアSランクの魔導師がすでに動いて
るんだ」

少女の足元に寄り添う大きな橙色の狼が心配そうに言葉を発する。
フェイトと呼ばれた少女は微笑み、その頭をそつと撫でた。

喋る狼とコスプレ少女。二人（？）の間には確かな絆が感じられ
た。

「うん。聞いている。スクライアの天才児、ユーノ・スクライア。
正面からぶつかるとは避けないと」

でも、譲れない。

澄んだ瞳の少女は静かに闘志を燃やす。

「母さんのために」

夜の街に狼の遠吠えが響き渡った。

アリサ・バニングスは上機嫌だった。

香りのいい紅茶を口に含み、笑みを浮かべる。

頻繁にやるすずかの家でのお茶会だが、今日はちょっと特別なのだ。

アリサには二人友達がいる。一人はこの家の娘、月村すずか。もう一人は高町礼也。自称普通の子。

二人だけ？ とか言われそうだけど全然寂しくはない。二人は親友だと思ってるし、二人もきつとそう思ってくれてる。たぶん。だといいなあ……

それはともかく。

自他共に認める仲良しグループなのだけど、いくら仲が良くてもどうしても秘密というものはできてしまうものだ。中でも礼也はいっぱい秘密を隠してる。すずかも同じ考えだったから間違いないはず。

仕方がないとは思うものの、親友を自任するアリサとしてはあまり面白くないわけ。

今日はその礼也が、自分から秘密を打ち明けてくれると言ってきたのだ。

軽い調子ながらも真剣な目で告げた礼也に、すずかと二人で思わずガッツポーズしてしまった。

すずかもアリサも、女の子みたいな顔してるくせに全然弱いところを見せてくれない彼のことを結構心配してる。こっちはたくさん相談に乗ってもらってるもんだから余計に気になるし。

だからようやく自分たちを頼ってくれたような気がして嬉しかった。

さあ、何でも言うてきなさい！ いじめられてる、とかシヨタコン疑惑のあるノエルさんになんかされてる、とか実は女の子です、とか何だっついていいわよ！ いくらでも助けてあげるし、受け入れてあげるから！

「実はね」

ティーカップをソーサーに戻し、一呼吸おく礼也。関係ないけど

コイツって無駄に作法がしっかりしてるわよね。最初にお茶に招いた時なんて先生より綺麗で、こっちが焦ったくらいだ。

「僕」

ゴクリ。自分の唾を飲む音がやけにうるさい。
わくわく。

手に汗を握る。隣を見ればすずかも緊張してるのが分かる。
どきどき。

「魔法使いになったんだ」

思わず殴った私は絶対に悪くないと思う。

五章

僕は今、正座している。

下は芝生だからそんなに辛くないけど、頬と後頭部が痛い。特に後頭部。

「もう、何考えてるのさ君は！」

原因は目の前で仁王立ちしてる金髪っ娘二人。

アリサと、この間恐喝してきた娘。ユーノ・スクライアちゃん。

「魔法は秘密にするように、つて。言っただよね？」

この娘、僕がアリサたちにしゃべった途端後ろに転移してきたんだ。そのまま後頭部に痛恨の一撃。

何で殴ったし。絶対拳の痛みじゃない。そもそもなんで聞いているのさ。

「この付近にジュエルシードの反応があったからサーチしてたんだよ」

律儀に答えてくれるのはいいけど、僕の足をグリグリ踏むのはやめようか。アリサとすずかが引いている。

「君が誤魔化そうとするからだよ」

言いがかりも甚だしい。真つ当な疑問をぶつただけじゃないか。そして何で殴ったかは今分かった。僕の頬ペシペシ叩いてるナイフの柄でしょ。殺す気ですか。

「で？　なんでしゃべったのかな？」

ジュエルシード放っておいていいのかと聞きたいけど、そうしたらナイフの刃がこっち向く気がする。

「……まじめに答えるとね、こういう秘密って複数人で共有した方がやりやすいと思うんだ。もちろん信頼できる相手じゃなきゃ駄目だけどさ。その点二人なら家族並みに信頼してる。それが一つ目の理由」

ペシペシペシ……

とりあえず合格、か？　これがザクツ！　になったらゲームオーバー。なにこれこわい。

「ふ、二つ目はね、こっちのが理由としては大きいんだけど……ジュエルシードみたいな危険物が街中に散らばってるならさ、せめて友達には巻き込まれて欲しくないと思わない？」

内緒にしてたら危険性すら教えられないのだ。それで彼女たちが酷い目にあつたら悔やみきれない。

ペシペシ……ピタ。

「はあ。理由は分かったよ。でもあんまり褒められたことじゃないんだからね？」

言い足りなさそうだけどナイフを仕舞ってくれるユーノちゃん。これで納得してくれるのだからきつと優しい娘なんだろう。アリサ以上にバイオレンスだけど。

そして気持ちを切り替えたのか、先日僕にした説明を二人に繰り返す。

次元世界の概念。時空管理局の存在。ジュエルシードのような口ストロギアの危険性。魔法のあれこれ。そして今海鳴に潜んでいる危機について。

「その、ゴメン。私たちのために言ってくれたのに、殴ったりして……」

説明が終わると、やけにしおらしくアリサが謝ってきた。

素直なのはいいけど、ちょっと落ち込みすぎかな？　らしくない。

「全然気にしてないよ。友情と信頼の証を右ストレートで突き返されたことなんて、全然」

「思いつきり気にしてるじゃないのー！！」

「あはは、冗談だよ。涙目になっちゃって。可愛いなあ、もううがー！　ってなったアリサをさすが宥める。

うん。いつも通りだ。

……あ。

ホッとしたら大事なこと思い出した。

「ねえ、ユーノちゃん」

勝手に人のお茶を飲んでるのはまあ許すとして。

「なに？ あとボクのご事はユーノでいいからね」

「あ、うん。僕のご事も礼也でいいよ。それでさ」

「？」

「ジュエルシード。探さなくていいの？」

「……………あ」

目を見開いたユーノの背後で、青い光が立ち昇った。

六章

真つ先に我に帰ったのは、やはり経験豊富なユーノだった。

「封時結界！」

ユーノの足元に翠色の魔方陣が現れ、結界（多分）が周囲に広がっていく。

生き物の気配が一切なくなり、残ったのはユーノと僕。それからアリサとすずかのみ。

「……あれ？ 魔力持ち以外は弾かれるんじゃないっけ？」

「あんな至近距離で展開して下手に干渉されたほうが厄介だからボクが入れたの！ 二人は礼也が守ってよね！」

そう言いつつもこっちに防御結界っぽいのを張ってくれるユーノ。かっこよすぎる。

全員が見つめる先で青い光がようやく落ち着き。

にゃ〜お。

「………すずか、すごいね。あんな大きな猫も飼ってるんだ」

「違うよ！？」

うん、知ってる。

響き渡る鳴き声。

メキメキとへし折れる木々。

森の上から覗く、愛らしい、仔猫の顔。

「……たぶん、仔猫の大きくなりたいて願望がジュエルシールドに正しく叶えられたんだらうね」

解説するユーノも呆然としている。

確かにそんだけ大きけりや他の猫に餌盗られることもないよね。

月村家のエンゲル係数は跳ね上がるだらうっけど。

どしんっ、どしんっ。にゃ〜お。

猫の足音なんて初めて聞いたよ。グレイプニルの材料の一つが今ここに！……どうでもいいな。

「とりあえず、攻撃性はなさそうだからさっさと封印
落ち着いたユーノがその手に魔力を集めた瞬間。
ズドオオオン!!」

金色の魔弾が猫にぶち当たった。

「アルフ、足止めを!」

「ああ!」

弾の飛んできた方向に目を遣ると、黒衣の少女に橙色のでっかい
犬がこちらへ飛んできていた。

金色の長いツインテールが目立つ少女は猫の方へ。そして犬の方
はユーノに突っ込んでくる。

「なめないで」

それをあっさり避け、後ろ足を引っ掴んだユーノ。

そのまま振り回し、

「ちょ!?!」

「飛んでけっ」

少女の方へブン投げた。……魔法なしでも強いんだね。

しかしそれだけでは終わらないユーノちゃん。

「アルフ!?!」

大型犬より大きいその体を受け止めて体勢を崩した少女。
そこへ、

「Laser Cannon!」

翠の奔流が迸った。

「……避けられちゃったかあ。やっぱり砲撃は苦手だなあ」
魔力の残照が消える。

その先にはマントを大きく削がれながらも健在の少女たちが。犬
は気を失ってるっぽいけど。

「くっ、やっぱり桁が違う。母さん!」

少女の叫びに応じたのか。

その眼前に現れる巨大な魔方陣。

……………え？

『全く。魔力反応を捉えて起きてみればマスターはいないし、フレットもどきはマスターの見せ場を搔っ攫おうとしてるし』

ばた。とユーノが倒れる。同時に、少女を囲んでいた光弾は消失。凍った空気の中、ユーノの頭があつた辺りに浮かぶ赤い宝玉がチカチカ点滅する。

『マスター、聞いてますか？ 置いていくなんて酷いですよお。

慌てて転移してきたんですから』

それは紛れもなく、先日押しかけ相棒（？）となつたデバイスで。

「な、な、なにやってんのレイハああああ！？」

僕は間違いなく今生最大の悲鳴をあげた。

七章

陽光が気持ちよかったのか、いつの間にか寝てる仔猫（大）。
気絶してる犬とユーノ。

涙目でぼかんとしてる幼女三人。

ビュンビュンと目の前を飛び回っている赤い何か。

……どうしてくれるんだこの空気。

とりあえず赤いのは無視して一番重症っぽい謎の女の子の方へ。

腰が抜けたのか、空も飛ばずにへたり込んでるし。

「えと、大丈夫？」

「いや……！」

思いつきり怯えられた。うさぎみたいに赤い目がすごいウルウルしてる。人形めいた可愛らしい顔も相俟って、罪悪感が半端ない。こっちも泣きそうだよ。

『マスター、早くその娘やっちゃんいきましょう！ 今ならただのサンドバツクです！』

「あの怖いお姉ちゃんは寝ちゃったから。ね？ もう大丈夫だよ」
近づいたら泣かれそうなので、少し離れたところに腰を下ろして再チャレンジ。

ついでに物騒なこと言ってるのは握りつぶす。

手の中から恍惚とした声が出るけど聞こえない。聞こえないっ
たら聞こえない。

「……………いじめない？」

「うん。いじめたりなんかしないよ。ほら、あのお姉ちゃんたち
のどこ、行こ？ あのお姉ちゃんたちは優しいから」

「……………うん」

よかった。なんか幼稚園児をあやしてる気分。どうも微妙に幼児
退行してるっぽい。

それはいいんだけど、頷いてはくれたものの動かない。

もじもじ。もじもじ。

「? どうかした?」

「その……あしが、うごかないの」

ああ。本気で腰が抜けてるのか。気持ちは分かる。ユーノちゃん、すごい唾つてたもんねえ。あの娘絶対DSだよ。優しいとか思ってた数分前の僕を殴つてやりたい。

警戒はだいぶ解けてるみたいなので、近くに寄って背中をさすつてあげる。

吐いてる人とかによくする行為だけど、子供にやると結構安心させる効果もあつたりするのだ。たぶんだけど。

「おぶつていくから、しっかり掴まって」

ちよつと落ち着いたところで女の子のまえにしゃがみこむ。

「……ん」

なんかすつごく素直。

すっかりとしがみついてくれたところで、そつと立ち上がる。

……軽いな、おい。ご飯食べてるのか?

気になったけど今は後回し。

椅子のところまでゆっくり運んで座らせる。

「アリサ、すずか。この子のことお願い。そばにいてあげて」

僕も付いててあげたいけど、あんまりノンビリもしてられない。だつて結界消えてるんだもん。あんなデカイ猫が見つかったら大騒ぎだ。

あれで意外と面倒見のいいアリサと、よく気の回るすずかなら大丈夫だろうし。

くいつ。

猫の方へ行こうとしたら服の裾を引っ張られた。

「どうしたの?」

うるうる。

「どっか、いくの?」

……何この子かわいい。

「あのねこさんをこっちに連れてくるんだよ。あんなところで寝たら風邪引いちゃうからね。そうだ！連れてきたらねこさん抱っこしてみる？」

「……うん！」

ヤバイ。なんか目覚めそう。

ぱあつ、と笑顔になった女の子に戦慄しつつも猫の真下に。

「レイハ、できる？」

握り締めたままだった手を開いて確認する。

『ああつ、マスターの温もりが全身に……ごほん。もちろんです、マスター』

「……じゃあ、お願いね」

とつさに放り投げたくなっただけど今は我慢。

汚物を摘まむようにして猫にくつつける。

「……なんかすごいあつけないね」

魔力光すら漏らさず、あつという間に仔猫は小さくなった。

そのそばに青い宝石、ジュエルシードが浮いている。

『封印、つと。状態がひどく安定していましたからね。暴走状態

だところはいきませんから、舐めちゃいけませんよ？』

ジュエルシードを吸い込みながら忠告するレイハ。

基本的にぶつとんでる子だけど、だいたいは僕のことを想ってくれてるからいまいち怒る気にもなれないんだよねえ。それが僕のためになるかはともかく。

「わあ、ねこさんだあ！」

まあ、今はレイハのことはいい。

とりあえずこの子が可愛すぎる。

眠ったままの仔猫を抱いて戻った僕を迎える笑顔。この笑顔のためなら死ぬる。かもしれない。

「その子、フェイトっていうんだって」

仔猫を抱きしめてはしゃいでる女の子を見ると、アリサが隣に来て教えてくれた。

ちゃんと仲良くしてくれてくれたらしい。

すずかの方はそのフェイトちゃんと一緒に仔猫を撫でている。

その様子を見るに、もうすっかり打ち解けているようだ。

よきかなよきかな、っと。

二人してにやにやしている。

『ああ、フェイトがあんなに笑顔で……ありがとうございます』

『うんうん。私からも姉としてお礼を言っわ』

なんか出た。

「……今度は何？」

いい加減疲れてきたんだけど。格好からして面倒臭そうそうだし。片方は黒のタイツにボディースーツをくっ付けたような服。正直下着にしか見えん。一応白いジャケットを羽織ってるけど、サイズがぴつちりの上に一つしかボタン留めてないからほとんど隠せてない。ナースキャップじみた帽子がまた異様さを際立たせる。

薄茶色の髪をした優しそうな美人さんだけど、それだけになんかすごい残念。似合ってはいるんだけどさ。

でもこっちはまだマシなんだ。

問題はもう片方。

フェイトをそのまま幼くしたような少女。

君はなんで素っ裸なんだよ!？」

『へっ? 私たちが見えるのですか?』

見えちゃなんかまずいのか。いや、幼女の方は確かに見られちゃまずいか。

いまさら恥ずかしくなったのか手で隠してるけど、もう遅いって。その様子に苦笑しながら美人さんは少し考えるような仕草を見せ、『うーん、まずいというかですね……私たち、幽霊なんですよ』
につこり笑って言うてくれた。

………はい?

八章

ドタバタしたした一日も終わり、ようやく夜になった。

床に敷いた布団にぐてー、っと寝そべる。

普段はベッドを使ってるけど、今日はお客さんが使用中。

シンプルな白いベッドを使っているのは、遊びつかれて寝ちゃったフェイトちゃん。

もし暴れだしたら危ない、ってことで犬と一緒に連れて帰ったのだ。

アリサもすずかも引き取りたがってたけど、強引に押し切った。だって可愛いんだもん。

ちなみに犬の方はアリサに借りた猛獣用の檻に入れて庭に置いてる。

逆に誰も引き取りたがらなかったユーノちゃん。

二人ともめちゃくちゃ怖がってたので、仕方なく彼女もウチで引き取った。

フェイトちゃんのトラウマになってそうなので部屋は別だ。今はお姉ちゃんの部屋にいるはず。

……しかし、犬もユーノちゃんも結局起きなかったな。犬は分からないけど、ユーノちゃんが起きたら絶対に病院に連れて行こう。レイハが言うにはどっちも大丈夫らしいものの、さすがに心配だ。

「はふう……二人のおかげでだいたい事情はわかったけど。僕じゃあどうしようもないよねえ」

思い起こすのは幽霊の二人、リニスさんとアリシアちゃんに聞いたフェイトちゃんの事情。それは二十六年前の事故から始まる。

意に沿わぬ実験による事故が招いたアリシアちゃんの死。

その事件がアリシアちゃんのお母さん、プレシア・テスタロッサを狂わせた。

優秀な科学者だったプレシアさんはアリシアちゃんの死体を保存

し、記憶転写型クローンの研究に取り掛かる。

体を壊してまで長い年月を研究に費やし、ついにはその技術を完成。

けれど、そうして生まれたクローンは、アリシアちゃんの記憶を持ちながらも全く別の存在だった。これがフェイトちゃん。

プレシアさんが壊れたのはこの時。

現代の技術では蘇生が不可能だと悟り、過去の遺失技術に頼った彼女はフェイトちゃんを魔導師として鍛え上げる。

望みのロストログアが見つかったときに、病に冒された自分の代わりとなる駒として。

その養育係として生まれたのがリニスさんだ。使い魔、という存在らしく、アリシアと一緒に死んだペットの山猫が素体になったそ
うだ。

プレシアさんのフェイトちゃんへの扱いは酷いものだったらしい。リニスさんは心を痛めつつもフェイトちゃんの教育を終え、契約通り消滅することになった。

そのとき見たのが、半ば悪霊になろうとしていたアリシアちゃんの姿。

当然の結果と言えるかもしれない。

プレシアさんの未練によって成仏することもできず、自分のためにやつれていく母の姿を見続ける日々。

それが終わつたかと思えば、ようやくできた妹のような存在を虐待する、優しかったはずの母。

その光景をただ見ていただけしかできなかった。

心の均衡を崩すには十分すぎる。

慌てたりリニスさんは気合（！）で現世に留まり、アリシアちゃんの面倒を見ることにしたんだとか。

猫には九つの魂があるっていうけど、もしかしたら本当なのかもしれない。

それからは結構楽しかったらしい。

プレシアさんの枕元に立って、説教と泣き落として虐待をやめさせたり。

次第に子供らしさを取り戻していくフェイトちゃんを愛でたり。たまに街に出る二人に付いていってはウィンドウショッピングしたりタダで映画を見たり。

とにかく遊びまわったそうなの。

けれど、虐待こそなくなったものの、プレシアさんはアリシアちゃんのことを諦められなかった。

結局、プレシアさんはロストロギアを求めることに。古の都、アルハザードへの道を開くため。それがどんなに不可能に近かったとしても。

今回のジュエルシード探索はそうして始まったらしい。始まった途端に終わったけど。

なんとかしてあげたい。切にそう思った。

たぶんだけど、アリシアちゃんトリニスさんはもう自然には成仏できないんじゃないだろうか？

彼女たちの顔を見てるとそんな考えが浮かんできてしまう。

長く現世に留まりすぎたせいかな、その行動のせいかな、はたまたなんらかの魔法的要因によるものかな。

おそらく彼女らの魂は変質してしまっている。幽霊なんて見たことのない僕が知覚できるのがその証拠。

オカルトなんて完全に専門外。だから僕の推測は的外れなのかもしれない。

でも、もしこれが正しかったら。

死ねばそれで終わり？ それがこの世の真理？

そんな理なんてクソくらえだ。

その例外を僕自身が体験している。

一度死んだ僕が、こうしてここにいる。

だから、諦められない。そういうものだ、なんて割り切れない。

安っぽい同情や、くだらない偽善かも知れない。

別にそれでもいい。

とにかく彼女たちを救いたい。

だけど……それなのにつ！

この世界よりずっと進んだ技術がある世界に生きた僕の知識が、
経験が。

死者蘇生なんて不可能だと声高に告げてくる。

僕のはあくまでもイレギュラー。参考にすらならない。プロセス
がわからないし、そもそも幽霊になったこともないのだから。

「こんなに自分の無力を呪ったのは久しぶりだよ……っ！」

フェイトちゃんの寝顔を眺める二人は幸せそう。それが余計に
悲しい。この二人はきつと諦めきってる。死を受け入れてる。じゃ
なきゃ、こんな綺麗な顔するもんか。

僕の感情を察したのか、アリシアちゃんがくすつ、と笑う。

『基本的にさ。生き物の体って、触ろうとすると弾かれるんだよ
ねー。例外は自分の体』

でも。

言い聞かせるように。腹が立つくらい透き通った笑顔で。

『弾かれはしない。けどそれだけ。何度やっても素通り。ああ、
これが死んだってことなんだなー、って妙に納得しちゃった』

もう死んでるんだよ、と。だから気にしないで、と。

悲しみの欠片すら見せず、達観したように話すアリシアちゃんが
なんだか遠く見えて。

僕は少し泣いた。

『ふむ……マスター』

珍しく黙り込んでいたレイハが口を開いたのはその時だった。

二人を知覚できない彼女のために念話で話を伝えてからは一言も
喋っていなかったのだけど。

『二人を救いたいですか？』

いつもと違う真面目な口調に迷わず頷く。

「……………レイハ、なにか方法があるの？」

その言い方だと、まるで……………

わずかに期待を抱いて尋ねると。

『もちろんです』

返ってきたのは自信に満ち溢れた声。

『私はマスターのデバイスですよ？ マスターの願いに応えることが私の役目です』

八章（後書き）

この辺はリニスを出したくて出来た、ちよっぴり暗めのお話。無理矢理なところが目立つけど適当に流してください（汗）

九章

用意するもの。リニスさんとアリシアちゃんの服。以上。

「……これだけでいいの？」

自信満々なレイハの指示に従ってお姉ちゃんとお母さんの服を借りてきたけど。

もっと蠟燭とかお香とか使うのかと思ってた。

『はい。いいんです。必要なものは私が持つてますから』

そう言ったレイハから出てくるのは十二個のジュエルシード。ユーノ、集めた分入れっぱなしだったんだな。

って、違う。

「それで何する気!？」

ユーノ曰く、確かにジュエルシードは願いを叶える宝石だけど、大抵の場合は歪んで叶えてしまう代物。おまけに扱いが難しく、一個のジュエルシードですら危険な次元震を引き起こしかねないんだとか。

それが十二個。暴走した時の脅威は計り知れない。

けれどレイハは何でもないことのように、

『問題ありません。私が制御しますので』

軽く言っただけ。

『私が未来から来たことはお話ししましたね』

「うん。っていうかそれしか聞けてないけど」

未来から僕に会うためにタイムスリップしてきた、って言われたときは思いっきり引いたよ。

あ、リニスさんたちめっちゃ驚いてる。まあ、驚くよね。時間遡行は不可能だつて証明までされてるって話だし。

『それですね。私が来た未来では、ジュエルシードの制御方法が確立してたんです』

……この子、下手なロストロギアよりすごいんじゃないだろうか。

管理局に目を付けられないように頑張ろう。ユーノの言うことが本当なら、管理局つてあちこちでロストロギアを強引に接收してるらしいもん。せっかく発掘したロストロギアをいくつも持ってかれた、って嘆いてた。

『もつとも、暴走した時ほどの効果は望めませんが。それでも一人当たり六つも使えば、人形に魂を宿らせるぐらい容易いです。だぶん。まあ、マスターの想像力次第でしょうね』

たぶんなのか。まあ、レイハも靈魂なんて扱うのは初めてだろうし、仕方ないか。

……ん？

「人形つて言ったけど、そんなものないよ？」

『今から造るんです。まずはマスター、アリシアちゃんの姿のイメージを私に送ってください』

レイハが輝いて見えるよ。

どうやるのかは分からないけど、言われたとおりをやってみる。開き直ってるのか、ノリノリで全裸のまま色んなポーズを決めるからそれをレイハに中継。

僕の目を通した映像でならレイハにも二人が見えるんだよね。声は聞こえないから僕が通訳(?)してるけど。

おいコラ股を開くな。五歳児のを見たって嬉しくない。しばらくそうしていると。

『はい、オーケーです。それじゃあマスター、ちよつと魔力を貰いますよ』

「へっ?……ひゃうっ!?!」

唐突な合図に心構えもできず、思わず変な声が出た。うう………なんでこんな気持ちいいのさ。

時間にして十秒ほどか。

魔力を吸われる感覚がなくなり、閉じていた目を開く。

「……おお」

目の前にあったのはアリシアちゃんと寸分違わぬ体。これ、人形

というより複製だろ。

魔力でできているからか、アリシアちゃんが恐る恐る触れてみても弾かれない。

『おお、自分の体の時とは違うなんか変な感触』
つんつん。つんつん。……にやり。

面白がって自分の人形を突いていたアリシアちゃんが親父ギャグを思いついた中年みたいな笑みを浮かべた。
人形にびったり重なるように寝そべると。

「幽体離脱〜！」

……………え。

「？ ………………ありや？」

不思議そうに自分の体を見下ろすアリシアちゃんの、人形。

『……………魂舐めてましたね。完全に定着してるみたいですよ』

なんかあつさりアリシアちゃんが蘇った。……………何この微妙な気持ち。

『んんっ、気を取り直していきましょうか。結果的には最高のものですよ』

そうだよな。ジュエルシールドなんて使わなくていいならその方がいいもん。レイハ冷静。

『では、次はリニスですね』

『はい。よろしくお願いします』

嬉し涙を拭い、頭を下げるリニスさん。本当に嬉しそうな笑顔を見ると、いかにアリシアちゃんのこと心配してたかが分かる。

この優しい使い魔さんのためにも、もうひと踏ん張りだ。

レイハ、頼んだよ。

『任せてください。ではリニス。脱いで』

……………今なんて言った。

『ぬ、脱ぐんですか？』

『はい。じゃないと正確な人形が造れませんし』

いや、造れるだろ！？　こんだけぴっちりした服着てるんだからさ。

『なにを躊躇うんです？　リニスは完全な体が手に入る。マスタ―は夜のオカズが手に入る。いいことづくめじゃないですか』
無視か。そして何が夜のオカズだ。勝手に人を変態にするんじゃない。そもそも精通すらまだだよ。

二人から何か……って、どうした二人とも。

『男の子、だったんですか？』

「何を言う。どっからどう見ても男の子……に見えないんだった。忘れてたよチクシヨウ」

女の子と思われたんだね。アリシアちゃん顔真つ赤。

でも安心して。君のセクシーポーズはオカズにしないから。とうかなれない。だから叫ぶのはやめよ？　君もう幽霊じゃないから声聞こえちゃうから。

レイハは焦る僕を追い詰めるように、

『さあ、早く脱ぎなさい。まな板にしますよ』

『脱ぎます！　すぐ脱ぎます！』

ちよ！？

く都合によりカット

『どうですか、二人とも？　違和感はありませんか？』

いろいろ大変だったけどリニスさんも無事人形に納まった。

何が大変って、二人とも全然恥らわないんだよ。

最初はいきなりだったから過剰反応したみたいだけど、リニスさんは大人だし、アリシアちゃんに至っては精神的にはもう三十歳である。九歳児相手に恥ずかしがる理由もない。

……僕も前世あわせたら四十近いけど。言ったら叫ばれかねないから当分は秘密。

「完璧だよー？　服も私好みだし」

お姉ちゃんのお古着を着たアリシアちゃん。女の子らしいピンクのワンピースだ。ちょっと大きめだけどよく似合ってる。今じゃもっぱらパンツルックだけど、こんな服着てた時代もあったんだねえ。

「リンカーコアもあるようですね……どういう理屈かわかりませんが、すごいですね」

リニスさんのお母さんの服。落ち着いた色のシャツに白いカーディガン。下は桜色のロングスカート。どうしても猫耳を隠したいらしく、季節外れのニット帽を被っている。……可愛いと思うんだけどな。

ちなみにリンカーコアっていうのは魔力を作るための目に見えない器官らしい。そんなのどうやって再現したよ。

『問題ないようですね。それではお二人の体について説明します』
レイハの説明によると。

参考にしたのは『夜天の魔導書』というロストロギアにあった守護騎士プログラムというやつらしい。……真面目にレイハがロストロギアに指定されそう。

魔法生命体というものになっているそうで、レイハの改良によって三大欲求まで備えているとのこと。要するに体が特殊な魔力で出来ていること以外ほとんど人間と変わらない。

ただ、存在のための魔力を供給しているのは主として設定された僕であり、怪我をしても僕がいれば再生できる反面、僕が死ねば小さな傷すら治らなくなる。二人は全然構わないと言ってくれたが、これでそうそう死ねなくなった。

ちなみに主といっても命令権があるわけではない。念のため。さらに人間と違う点として、年を取ることがないらしい。

「……………え、もしかして私ってずっとこのまま？」
愕然としたように呟くアリシアちゃん五歳。

『エターナルロリータ……………ぷっ』

レイハああああ！？ 前から思ってたけど、絶対性格悪いよね！？
『心配しないでください。アレンジを加えていますから、肉体年齢

は操作できません』

ほっ、よかったあ。アリシアちゃんも胸を撫で下ろして、
「……って、何やってんの!? その服で大きくなったら下見え
ちゃってるから! 穿いてないから丸見えだよ!」

いきなり大きくなった。十二歳くらいだろうか。年の割りに無駄
に発育がいい。ちょっと引つ張つたら破れそうなくらいパンパン。

……穿いてないのは僕の趣味じゃないからね? 五歳の頃の下着
なんて残ってなかったっただけで。

「ん〜? 興奮しちゃった〜?」

「うっさい三十路」

「照れない照れない」

やばい。殴りたい。否定しきれないだけにむかつく。

精神衛生のためにアリシアちゃんは無視してリニスさんに向き直
る。

……なんで自分の胸揉んでるのさ。心配しなくてももまだリニスさ
んの方が大きいよ。まだ。

「えーと、リニスさん。プレシアさんのところへ行くんですね
?」

二人はプレシアさんを止めたがっていたはずだ。

案の定どちらも真面目な顔になって頷く。ついでにアリシアちゃ
んは五歳の体に戻る。あーあ、服伸びちゃってるよ。お姉ちゃんに
なんて言おう?

『では今から行きましょうか。朝までに戻ればいい訳ですし、プ
レシアが寝ていたら叩き起こしましょう』

「そうですね。それでは、次元転移。次元座標7876C 44

19 3312……」

なんか長いコードを読み上げるリニスさん。

驚色の魔方陣が広がる。僕はその光を避け……って、

「アリシアちゃん、離してくれないかな? ここにいたら転移に
巻き込まれそうなんだけど」

なんだその変なものを見る目は。僕はお姉ちゃんへの言い訳を考
えないといけないんだ。

「あのね。当事者なんだから君も行くに決まってるでしょーが」
えー。やったのほとんどレイハじゃん。僕は君らの主になっただ
けで。

「……………待て。マジで離して。娘さんの主人になりました、と
か言ったらぶつ飛ばされるじゃないか」

性質上殺されはしないと思うけど、生かさず殺さずで監禁とかさ
れそうなんだが。アリシアちゃんに対する執念とか聞いてたら普通
にやりそう。

「だーめ。ちゃんと説明してあげるから、ね？」

それが一番怖いんだって。その顔は絶対変なこと言う気だよね。
体の隅々まで視姦されたー、とか。

「事実じゃん。男らしく諦めなよ」

「……………レイハ、もしものときは頼んだ」

『まかせてください。我に秘策あり、です』

驚色の光が一層強く輝く。

「……………開け、いざないの扉。時の庭園、テスタロッサの主のもと
へ！」

どうか無事に帰れますように。

十章

「ここが時の庭園。プレシアの家になりますね」

ピシャツ！　ゴロゴロ、ピシャーン！

「……………帰る。レイ八、次元転移」

リニスさんとアリシアちゃんに押さえ込まれた。

「離して！　ここ絶対家じゃないって！　魔王いるって！」

命の危険しか感じない。なんだよこのおどろおどろしい雰囲気。

「落ち着いてください！　プレシアも難しい年頃なんです。もとは綺麗な庭園だったんですよ？」

綺麗な庭園がどうやったたらこうなるのさ。っていうかプレシアさんもう五十歳じゃん。あ、更年期か。

「……………そつか。大変なんだね」

更年期障害って辛いらしいからねえ。二人の話からして治療なんてしてないだろうし。

「なんかいきなり大人しくなったねー。ま、いいや。早いところ行きましよ」

大豆がいいんだっけ。納豆とかは食べそうにないしなあ。豆乳とか今度持ってきてあげようかな。

「誰！？」

いや、貴女が誰？　考え事してたらいつのまにか玉座の間っばいここにいたんだけど。

玉座（？）に座ってこっちを見下ろしてる妙齡の女性。

長い黒髪に紫の妙に露出の激しい服。

いかにも悪女っぽいんだが。紫の口紅とか初めて見たぞ。

「久し振りですね、プレシア」

……………この方がプレシアさんですか。若いなオイ。

けどアリシアちゃんとフェイトちゃんの露出癖の元凶が分かった。

五十でその服はやばいって。思ったより深刻な病状っぽい。

「アナタは……リニス!?」

「はい。あなたのせいで、戻ってきちゃいました」

険しい目で睨むプレシアさん。警戒を解くには至らなかったらしい。

けれど。

「私もいるよー」

僕の陰に隠れていたアリシアちゃんが顔を出すと。

「……え」

目は限界まで見開かれ、口は言葉を忘れた。

ふらりと。弱弱しく立ち上がり、まるで怯えるように一歩ずつ近づいてくる。

「あり、しあ……?」

「うん。久し振り、ママ」

震える瞳から、一筋の涙が零れた。

わんわん泣くプレシアさんを宥め、これまでの経緯を説明するのにおよそ一時間を要した。

さらにフェイトちゃんに優しくしなかったから、とかいって何十分かお説教。リニスさん意外とずかずか物言うのね。

お説教はまたプレシアさんが泣いて終了。なんでもフェイトちゃんに構ってアリシアちゃんのことを忘れるのが怖かったんだとか。アリシアちゃんに呆れられ、リニスさんには怒られてまた泣いた。

「礼を言っわ。タカマチ・レイヤ……君? 本当に、ありがとう」
化粧崩れまくりの酷い顔。それでも表情は晴れやか。

やったのはほとんどレイハだけど、この笑顔を見るとほんの少しでも手助けできたことを嬉しく思う。

「そういえば、私もお礼を言っませんでしたね。ありがとうございませす」

嬉しく思うんだけど。

僕自身はほとんどなにもやってないから、こんなに感謝されると心苦しいというか。

アリシアちゃん、この空気どうにかして。

僕のアイコンタクトが通じたのか。アリシアちゃんがにやっと笑って口を開く。

「うんうん。ありがとね、ご主人さま」

……………。

「アリシアちゃんに頼んだ僕が馬鹿だったよ！」

「マチナサイ、レイヤ」

扉開かないし！

「どういうコトカシラ？」

ひっ！？　なんかプレシアさんの右手がバチバチ鳴ってる！？

誤解とか言って通用する雰囲気じゃないよ！

「レ、レイハ！　秘策っていうのお願い！」

なんか出発前にかっこよく言ってたよね！　それに賭ける！

『お任せを。プレシアこれを見なさい』

レイハの言葉とともに空中に映し出される映像。

全裸のアリシアちゃんが色んなポーズを取って……

『次元世界中にこの映像をばら撒かれたくなかったら大人しくしなさい』

バチバチッ！

「レイハのばかああああ！　バリアジャケット展開！」

ズガー……ン！

僕が光に包まれるのと、紫電が辺りを埋め尽くすのはほぼ同時だった。

「あ、あつぶな……レイハのせいで危うく死ぬとこだったじゃないか。それからその映像ばら撒くのは無しだからね？」

『すみません。ドラマでこうやって脅迫して女の人を言いなりにするシーンを見たことがあったのですが……』

「何のドラマだよ……すぐに忘れなさい」
煙が晴れる。

周囲はぼろぼろだけど、バリアジャケットの展開が間に合ったおかげで死なずにすんだ。

けどまだ油断ならない。またバチバチ鳴ってるから第二撃がくるかも。

「ふん、少しはやるよう……」

？ どうした、プレシアさん？

剣呑な音を放っていた雷球が小さくなっていく。

「……礼也クン、人のこと言えないじゃん」

いや、何が。

「その格好ですよ！ どう見たって私の格好の方がマシだったじゃないですか！」

なんでさ。レイハと一緒に考えた力作だぞ。

モチーフはレイハの強硬な主張でズバリ『天使』。最初にイメー
ジしたのはギリシア神話のヘルメスで、踝のところに羽の付いたサ
ンダルや、帽子はないけど耳の上辺りに生えてる一対の翼がその名
残り。

それからヘルメスは天の使いではあっても天使じゃないって話に
なり、背中に大きな翼を一対生やして完成。翼は全部純白で統一し
てみた。

ちなみに、せっかくだから杖もヘルメスのに似せようかと思っ
たけど、取り回しに困るので断念した。だから杖は胸丈のシンプルな
直杖だ。中央部分にレイハの赤いコアが輝いている。

どうだ。どう見ても天使だろう。三対も翼があるんだぞ。

「知りませんよ、変態。ただの素っ裸の露出狂じゃないですか」

「？ 天使が裸なのは当たり前じゃないか」

一斉に白い目で見られた。

「むっ、これで文句ない？」

なぜか空気がしらけ、とりあえず命の危機は去った。
アリシアちゃんもプレシアさんの誤解を解いてくれて、万々歳。
それはいいんだけど、どういう流れでか僕のバリアジャケットを
変更させられることになった。

……なぜだ。

納得いかなかったけどあのプレシアさんには逆らえる気がしない。
あれは完全に子供を叱る親の目だ。

そんなわけで全然天使っぽくない格好をさせようとする三人に全
力で抵抗しつつ決まったのがこのバリアジャケット。

翼はそのままに、紐で留めることによって背中を大きく開けた膝
丈の白いチュニツクを追加したものになる。

背中が開いてるから翼の邪魔にもならないし、これはこれでいい
かもしれない。

何より天使っぽいし。

「全く。レイハ？ アナタが止めなきやダメじゃない」

『すみません、プレシア。あまりに楽しそうだったもので……』

プレシアさんとレイハがなんか喋ってるけど関係なさそうなので
放置。

そろそろ帰って寝ないと明日に響く。

……そういや、何で天使にこだわってたんだっけ。ま、いいか。

なんか理由があったんだろう。

『基本的に思い込みが激しいんですよねえ』

「……そうみたいね」

ふわあ、ねむ。

十一章

「……つてなことが昨日あったんだ」

「長いわよ。もう昼休み終わっちゃうじゃない」

僕がどんなに大変だったとしても今日は月曜日。学校に行かなければならない。

普段も学校はそう好きではないけど、妙に睨んでくるアリサとすずかの視線のせいでめちゃくちゃ居心地が悪かった。

内容が内容だけに昼休みまでは待つてくれたが、四時限目が終わった途端捕まって屋上へ。

フェイトちゃんが気になって電話を掛けたのに繋がらないから心配したらしい。

そついや着信音がしてた気がしなくもない。

さすがに悪いと思ったので、レイハの記録映像をこっそり見せながら昨日のことを説明した。詳しい事情はちょこつとぼかしつつ。

もちろん裸映像はとかは見せてない。アリシアちゃんのは既に削除済みだしね。アリシアちゃんのは。

「それで、結局フェイトはどうしたのよ？」

「幼児退行が戻ったみたいで、恥ずかしがってベッドに籠城したからリニスさんに任せてきた」

昨日の記憶がバツチリ残ってたらしく、真っ赤な顔でうーうー唸っててすごく可愛かった。

そこへリニスさんが顔出すもんだから、夢だと思ったのか今度はリニスさんを引きずり込んで離さなくなり。

リニスさんも満更じゃなさそうだったから放置してきたけど、下手したら今でも抱きつかれたままかもしれない。

ちなみにリニスさんは、フェイトちゃんのこと落ち着いたら僕の使い魔になるつもりらしい。恩を返したいんだとか。もつと軽いノリでいいのに。おかげで家族への説明が大変だった。赤飯炊かれ

そうになったし。

そしてアリシアちゃんの方はプレシアさんのところ。大人フォームになってミッドというところの病院に連れて行ってる。もし生き返れたら真っ先にやりたかったこと、だそうだ。プレシアさん、ごんだけ無理してたんだか。

「ふーん、じゃあ今日はアンタの家に行くわね。あのおつきな犬も気になるし」

「あ、あの犬ならやたら吠えて暴れるから、お兄ちゃんが知り合いの獣医さんのところに引きずってつたよ」

「すごいよね、お兄ちゃん。大型犬が全力で抵抗してるのに普通に歩いてくんだもん。」

二人とも引いてるけど、これくらい慣れてもらわないと。特にすずかなんか将来のお義兄さんになるんだよ？

「そ、そうだ。ユーノちゃんは大丈夫だったの？」

場の空気を変えようとすずかが口を開く。

けどユーノちゃんの名前出しただけでアリサがビクツッとなった。まだ怖いんだね。

でも安心してアリサ。

「ユーノちゃんはね、今朝目を覚ましたみたいだけど、暴れようとしたからお姉ちゃんがまた気絶させたんだって」

ウチはもつと強い人ばかりだから。お母さん以外は、飛ばれたらともかく室内戦闘じゃたぶん負けない。

「そ、そうなんだ……」

そうなの。

微妙な空気のまま予鈴が鳴り、とりあえず放課後はウチで遊ぼう、ということになった。

最初に気付いたのは一番目がいいすずかだった。

「あれ、何だろう？」
帰り道。

人気の多い大通りで、一際人が集まっている場所があった。
人だかりの中心にはカップルらしき大学生っぽい男女と、小学校
高学年くらいの女の子。

よく見たら男の人は頬に紅葉が出来てるわ、あちこちに痣がある
わ酷い状態である。

……二股がばれたとか？ 片方幼女だぞ。

よく分からなかったのを見ていたお婆さんに聞いてみた。

お婆さんが言うには、最初はただのカップルの痴話喧嘩だったら
しい。

けれど頬を叩かれた男の人が女の人に掴み掛かったところを見た
女の子は、なぜか女の人が暴漢に襲われてる、と勘違いしたらしい。
勇んで飛び込んでいき、あつという間に男の人をボコボコにした
そうだ。

なんともまあ……

「アリサみたいな娘だな」

「私はそこまでぶっ飛んでないわよ！」

一年の頃いきなり襲い掛かってきた奴が何を言う。

落とし物して泣いてたすずかに話を聞いてたところへまさかのとび
蹴り。

完璧油断してたからめっちゃ痛かったんだぞ。

「うう、その頃ちようど特撮ヒーローにはまっていたのよ」

それにすずかが怒って大喧嘩になり。

慌てて割って入ったけど、すずかを抑えるのがもう大変。すごい
力強いんだもん。固め技使わされるとは思わなかった。

それから三人ですずかの落とし物を探し、ちよつと仲良くなって。
典型的な悪ガキだったアリサをすずかと一緒に矯正したら、い
つの間にか三人でいるのが当たり前になってた。

「懐かしいなあ」

「そうだねえ」

「しみじみと思い返すなあ！ 今考えるとすつごく恥ずかしいんだから！」

いい思い出なんだけど、アリサの中では黒歴史になってるっぽい。アリサの赤い顔を堪能したところで女の子に注意を戻す。

どうも女の子の人が誤解を解いたらしい。あたふたしてるのがちょっと面白い。

あ、逃げた。足速いな。

残されたカップルは女の子の人が男の人を介抱してる。過程はともかく、あの女の子のおかげでよりを戻したようだ。

年齢的に暴行罪にはならないだろうし、通報する気もなさそう。一件落着なのかな。

そう思っている。

（『マスター』）

レイハから念話が入った。

（『あの黒髪の少女が向かった方向で魔法の発動を確認しました。魔導師かもしれません』）

なんと。悪人ではなさそうだけど、一応警戒しておくか。

「ただいまー」

「お邪魔します」

高町家。

家族は出払ってるけどリニスさんたちはちゃんといるみたい。居間から人の気配がする。

ガチャ。

「あら、おかえりなさい礼也
バタン。」

「？ どうしたのよ？」

なんでもないよ、アリサ。ちょっとびっくりしただけ。気を取り直してドアを開ける。

「ただいま、リニスさん。フェイトちゃんも」

「お、おかえりなさい、礼也」

居間のソファには談笑しているリニスさんとフェイトちゃん。

それはいいんだけど。

「……そこで喋りになってるのは何？」

一般的な居間の風景の中で異彩を放っている塊。

人型なのは分かるけど、リニスさんのバインドでガチガチに巻いてあつて全然見えない。

強盗とか？ にはしてはやけにちっちゃいんだけど。

「ああ、これですか？ あのスクライアの少女ですよ。フェイトを怖がらせたので」

……えー。

「結構優秀な魔導師みたいですよ。すごい速度でバインドブレイクしようとしてます。無駄ですが」

リニスさん強いんだね。

「籠めてる魔力量が多いだけです。どうやったのかわかりませんが、プレシアの使い魔だった頃と同じように魔法が使える上に、供給される魔力がかなり多いですから」

つまり膨大な魔力を持った熟練の魔導師、と。やっぱ強いんじゃないか。

それにしてもユーノちゃん気絶してばかりだ。あとで謝つとこう。

「え、えっと、初めまして。アリサ・バニングスです。礼也さんの友人をやらせていただいています」

「は、初めまして。同じく礼也さんの友人をやらせていただいている月村すずかと申します」

硬直の解けた二人が慌てて挨拶する。こういうときの二人は馬鹿丁寧だ。まだ言葉遣いは微妙だけど、さすがお嬢さまって感じ。

「あらあら、礼儀正しい子たちですね。もつと砕けた感じではないんですよ？ 礼也から聞いているようですが、使い魔のリニスといます。これからよろしくお願いしますね」

見惚れるような笑顔で返すリニスさん。その背後で磔の人型が蠢いているせいで台無しだが。結構不気味な光景である。

「フェイトちゃんは昨日振りだね。こんにちは」

けれどずかには意外にハートが強い。こちらこそよろしくお願ひします、などと言いつつフェイトちゃんに話しかけた。

「うん。こんにちは、すずか」

はにかみながらも小さく手を振るフェイトちゃん。可愛い。同じ顔なのにやたら擦れてるアリシアちゃんを見たせいか、余計輝いて見える。

「アリサも。こんにちは」

「こ、こんにちは！ んっん、さて！ 今日は何する？」

アリサは若干声が震えてたけど、持ち前の負けん気で持ち直したのかいつもの調子に戻った。

これなら大丈夫、か。今朝の錯乱っぷりを見ただけに、ちょっと心配だったけど。仲良くやれそうだ。

「だいぶ落ち着いてるね。リニスさんがなんか言ったの？」

アリサが持つてきていたランプの遊び方を興味津々で聞いている様子を見ながら尋ねる。すごく楽しそうなのだが、それだけに不自然。フェイトちゃんはプレシアさんのために必死でジュエルシードを探そうとしていたはずなのに。

「全部話しました。プレシアのことも、アリシアのことも。プレシアの病状が安定したら会いに行くそうです」

「それは、また……」

大丈夫なんだろうか？

アリシアちゃんの記憶を入れるために、五歳まで培養液の中で過ごしたというフェイトちゃん。

だからあの子は実質四歳なのだ。昨日のフェイトちゃんは、ある

意味とても年相応な姿だったのである。

そんな、親からの愛情が目一杯必要な時期にあんな話歪んでしまったっておかしくない。

病状が安定したら、なんていうのは方便だろう。おそらくは自分の気持ちを整理するための期間が欲しかったんだと思う。

歳に見合わないしっかりとした思考能力を持つフェイトちゃんだから余計に悩むはず。

けれど。

「大丈夫ですよ」

リニスさんは自信満々に言い切る。

「フェイトはきつと受け入れてくれます」

きつと、なんて言いつつ、その表情は絶対の確信を持っていて。

「私が育てた子なんですから」

とても誇らしげだった。

……まあ、もしものときはウチで保護しよう。

お母さんは子供大好きだし、お父さんは絶対お母さんに逆らえない。
い。

それにリニスさんもいる。悲しい顔なんてさせてやらない。

下心なんてないからね。

でも今は。

「礼也！ アンタも早く来なさい。大富豪するわよ！」

急かす大富豪の娘さんに答えながら、ただフェイトちゃんの幸せを祈った。

十二章

「ボクの扱い、酷すぎないかな？」

数時間にわたるバインドから解放されてグツタリしたユーノちゃん。

張本人のはずのリニスさんはフェイトちゃんとお風呂に入っていて、ここには僕一人。

女の子座りでへたり込んだまま込んだまま、じとーっと思上げてる。

「ボクってさ、君からしたら序盤のすごいお助けキャラだと思うんだ。言うなれば、間接的とはいえ君が魔法を知る原因になっちゃったから、仕方なく弟子にする凄腕魔導師的なポジション」

自分で凄腕言っちゃったし。というか弟子にされた覚えはないんだけど。君、基本的なこと教えたらずぐどっか消えたよね。

「結構楽しみにしてたんだよ？ 君の成長を後ろから見守って、ここぞという時に助けに入ろうと思ってさ。そしていずれ強くなった君と肩を並べて悪の総本山に乗り込む、って感じの展開を考えてたのに」

悪の総本山って何だよ。なんか変なスイッチ入ってる。突っ込みたいけど、いじけた子供みたいでやり辛い。あ、そのものずばかりか

「なのにな。君は全然ジュエルシード探そうとしないし、近くで発動しそうだと思ったら一般人に魔法ばらすし。敵っぼいのが出てきたからかっこいいとこ見せようと思ったら邪魔されるし。気付いたら敵っぼいのと仲良くなってるし。いつの間にかボクより強い使い魔と契約してるし。人が縛られてるのにすぐそばで楽しそうに遊びだすし」

どうしよう、この子？ 聞いてたら結構かわいそうに思えてきた。最後とかもう泣きそうだよ。

「えーと、そうだ！ おなか空いてるよね？ ご飯作ってあげる

「よ

よく考えたら、この子丸一日何も食べてないじゃないか。そりゃ不機嫌にもなる。とびつきり美味しいのをご馳走してやるう。

「逃げるの？ レイジングハート、返してもらおうかな？」

『百回死んで出直してきやがれ、凄腕魔導師（笑）』
泣かしてどうするレイハ。

なんかいい匂いがする。

おなかがぐくくと鳴った。

涙を拭って周囲を見渡す。

見慣れない木造の部屋。匂いのする方を見ると、ボクより女の子らしい顔をした男の子の姿が。

「あ、ご飯できたよ。簡単なスープだけど、栄養はたっぷりだから」

ボクを泣かせた張本人のくせに、何笑ってるのさ。

八つ当たり気味にそう思ったけど。

ぐく。

……まあ、仕方ないから食べてあげよう。

少し力の入らない体を起こして椅子に座る。うわ、近くだとほんとにいい匂い。

「パンもあるから、しつかり食べてね」

対面に座った礼也がニコニコと言う。

スープはトマトベースみたいだ。言葉通り、具がいっぱい入ってて栄養ありそう。

スプーンで掬って一口。

「……お、おいしい」

なにこれ。すっごくおいしい。むかつく。

貪るようにスプーンを動かす。

気付いたらスープはなくなっていた。

カツン、カツン、とスプーンが器の底をノック。

「気に入ってもらえたみたいで良かったよ。おかわりあるけど、いる?」

……その微笑ましいものを見るような目はやめて。もらうけど。

「よく食べたねえ。全部なくなるとは思わなかったよ」

「悪かったね、食い意地が張って!」

五人前くらい食べただろうか? 正直自分でもこんなに食べられるとは思わなかった。

「あはは、ごめん。嬉しくってさ。料理人冥利に尽きるというか、明るく笑う礼也からは悪い感情は伝わってこない。本気で喜んでくれるらしい。」

こちらとしてはガツガツ食事するのを見られて恥ずかしいことの上ないんだけど。

「その、ありがとね。おいしかったよ」

一応お礼は言っておくべきだろう。ほんとおなか空いてたし。おいしかったし。

礼也はきよとん、とした後どういたしまして、と笑ってくれた。

ユーノには友達がない。少ないとかそういうレベルじゃなくて、ゼロ。

ユーノは天才だった。弱冠九歳にしてS・ランクの神童。それが周囲からの評価。魔力量自体がずば抜けているわけではないが、もはやレアスキルのある魔法の超多重展開は誰にも真似できないと言われている。昨日機械兵に撃ったのもそれによるものだ。

子供というものは異質なものを排斥する傾向にある。ちよつと優れている程度なら良かった。けれどユーノの才はまさしく異端といつていいもの。

いじめ、というほどではなかった。それでも周りの子供たちには

怖がられ、怯えられた。親が居らず、拾ってくれたスクライアの部族はあちこちを転々としながらの生活だったから、そうなると友達なんて出来るはずもない。研究者気質の大人たちはユーノの才能など気にしていなかったが、言ってしまうえば無頓着なだけ。ユーノの境遇を気に掛ける人はいなかった。

だから、実はユーノにとって礼也は初めてまともに話す同年代の子供だったりする。

というわけで絶賛テンパリ中。

な、何話せばいいんだろ！？ よく考えたら大抵怖がられるのって戦ってるの見られときだったよね！？ ど、どうしよう！ あの金髪の子はすごい怖がってたし、ダメかも……

かっこいい熟練魔導師を演じていたときはよかったが、一度メッキが剥がれるとこんなものである。

そんな心中を知ってか知らずか、

「そういえば、ユーノちゃんって今どこに住んでるの？」

当たり障りのない質問。会話の糸口を探していたユーノはそれに飛びついた。

「い、今はねっ、向こうの森のほうにテントを張ってるんだっ」

「……………え」

あまり場を和ませる効果はなかったが。

なにか失敗した！？ と、あうあうするユーノに呆れたような声がかかる。

「えーと、まさか野宿してたの？」

「う、うん。そうだよ？」

どこかおかしいところがあったのだろうか。

「……………食事はどうしてたの？」

「携帯食料を持ってきてるんだ」

「……………風呂は？」

「公園の水道で……………」

ため息つかれた！？

「ユーノ」

「ひ、ひゃいつ!?!」

「これからウチで暮らすこと。いいね? 決定事項だから」

……………ええええええ!?!

それからあつという間。

会う人会う人、といつても礼也の家族だが、全員がウチに住め、
と言つてきて、気付いたら風呂に入れられ夕食を頂き、寝床まで与
えられていた。

といつても礼也のベッドらしいのだけど。本人は床に布団を敷い
ている。

同じ部屋というのはびっくりしたけど、初めてのことなのでちょ
っぴり楽しみ。

なんか友達みたいだよっ!

舞い上がり気味の胸の内を抑えて目をベッドに潜る。今日はちょ
っと眠れそうにない。

「よし、電気消すよ?」

「う、うん。おやすみ、礼也」

「ん。お休み、ユーノちゃん」

礼也はボクのことをどう思ってくれてるんだろうか?
ふと考える。

きつと怖がつてはない。

一緒に暮らそう、なんて言ってくれたし、同じ部屋で寝ようとい
うのだ。それはたぶん確実。

……………友達に、なつてくれるかな?

聞いてみたいけどどうしても踏み出せない。拒絶されるのが怖い。
友達になつてくれなかつたらそのときは……………専属料理人として誘
拐? あ、いいかも。意思を奪うロストログアがあつたはずだし。

でもレイジンググハートとあの使い魔は要注意だなあ。使い魔は四
六時中一緒にいるわけじゃないにしても、レイジンググハートは厄介

だ。今日見てた限りじゃ風呂にも付けて行ってたし、今も付けたままだ。ボクが誘拐しようとしたら絶対に邪魔するだろう。嫌がるのを無理矢理使おうとしたからか、すごい嫌われてるし。遺跡に埋まり込んでたのを見つけたのはボクなのに。

となると、どうやってレイジングハートを引き離すか、だね……

微笑ましい悩みが一体どういう思考回路を辿ったのか。

いつの間にか誘拐の手口を考え始めたユーノの横で、礼也は謎の悪寒に震えるのだった。

十三章

「リニスさん、どう?」

街の遙か上空に浮かびながら尋ねる。

ユーノちゃんがウチに住むことになった翌日。

学校が終わり、習い事のあるアリサたちと別れた僕は、ジュエルシードを探して回っていた。

探査魔法を使っているのはリニスさんだが。

何を隠そう、僕はこういった系統の魔法の適正が皆無なのである。一応使えるけどほぼ意味がないっていう意味で。魔力だけなら腐るほどあるのに。

だからユーノちゃんに任せようと思っていたんだけど、リニスさんがいるなら話は別だ。

「ふむ、当たりですね。一つですが反応がありました。今から絞込みます」

リニスさんは超有能。今だって光学迷彩みたいな魔法を維持しながら、涼しい顔でジュエルシードを捕捉しようとしてる。

その横でただ浮いてるだけの僕。うん、カッコ悪い。暇だし。といっても何も出来る事はないのでぼんやりとリニスを観察。服装、というかバリアジャケットは初めて会ったときと同じデザインだ。

出来れば翼を付けたかったが、邪魔ですから、と一蹴された。

普段は友達のお母さんみたいな印象だからあまり意識しないけど、こうして見ると本当に美人さん。

猫形態はさぞ可愛いだろう。そのうち頼んで見せてもらおうかな。益体もないことを考えていると。

「見つけました」

「おお、早いね。ユーノちゃんを取り逃がしてるところだから、もっと大変かと思ってたけど」

「プレシアの魔法は秀逸ですからね。限定付きとはいえ、あれでSSランクの大魔導師ですから」

ジュエルシードの数は全部で二十一個。手元に十二個あるから残りは九つだ。フェイトちゃんは一つも見つけれなかったらしいし。短期間にそれだけ見つけたユーノちゃんに見つけられなかったジュエルシードを、開始十数分で探し当てたのだからそのすごさは推して知るべし、だ。

しかしリニスさんは自慢げな様子など一切見せずに、ただ、と続ける。

「どうも排水溝の中に落ちてるみたいで。周囲に人が多いですし、夜になってから回収に来ましょう。幸い、暴走の気配はありませんし」

「分かった。じゃあ、一旦帰ろっか」

回収するだけなら無邪気な子供を装えばなんとかなるかもしれない。

けれど僕たちがしようとしていることには、結界の展開が必要不可欠なのだ。それには魔力光を目撃されないように人目の少ない時間帯を選ぶ必要があった。

そもそもなぜ役に立たない僕がここにいるかというと、レイ八の提案が原因だったりする。

「魔導師襲撃事件？」

学校からの帰り道。急に慌てた様子で話し出したレイ八の言葉に首をひねった。

『はい。今から六ヶ月ほどあとに、歴戦の魔導騎士による連続襲撃事件が起こる可能性があります』

いつになく真剣なレイ八にこちらも放課後で少し浮ついた気分を消していく。

『魔力を持つ存在が対象となります。桁外れな魔力を持つマスタ

ーが狙われるのはほぼ確かかと』

「時空管理局は？ 聞いた話じゃ、そういうのも取り締まってるらしいけど」

周囲に人はいないが、一応小声で尋ねる。念話で話せばいいのだが、会話してる気がしないからなんとなく嫌なのだ。

『時空管理局に、襲撃者に敵う人材はほとんどいません。そのわずかな人材も様々な任務で手が離せないのが現状です。数多くの次元世界を股にかける組織ですから、万年人手不足なんですよ』

「ああ……そういうえばそんなことも言ってたねえ」

魔法が認知されている世界でも、実は戦闘に耐えうるレベルの魔力持ちというのは案外少ないらしい。しかし管理局は質量兵器、この世界で言う銃火器、刀剣類を禁止しているので、戦力は魔導師のみ。その中でも優秀な魔導師は当然引つ張りだこになる。

時空管理局の役割を考えると、質量兵器の禁止自体はなかなかうまくまい考えだろう。

まず戦力の管理が楽。質量兵器と違って魔導師はポンポン増やせるものじゃない。そして生まれた魔導師を管理局に引き込めれば相対的な戦力はぐんと上がる。そもそも核兵器一発で管理局が壊滅する可能性だってあるし。

次に金銭的な問題。管理局はそれほど潤沢に資金があるわけではないらしい。ならば少数で強大な戦力となりうる魔導師は人件費の大幅な節約に繋がる。しかも質量兵器は開発費、製造費、維持費と必要な金額が馬鹿にならない。使うたびに消費するのだから、練習一回でも莫大な金額が飛んでいく。管理局の規模に見合わない資金力を考えると使えるはずがなかった。そして管理局が使えないのなら管理する世界にも使わせるわけにはいかない。

最後に建前にしている魔法のクリーンさ。確かに大量破壊兵器なんかを考えると、よつぼどマシかもしれない。魔力を全放出すれば日本が消えるかもしれないと言われた礼也にしてみれば微妙なところだが。

まあ他にもあるかもしれないが、今はどうでもいい。

とりあえず管理局が人手不足なのは理解できる。でもそれで事件に対応できなかったら意味ないと思うんだ。

「……今から何か備えられることはある？」

「うだうだ言っても仕方ないので思考を切り替える。さすがに襲ってくる分かってしているものを座して待つほど物好きではない。」

『そうですね……当面は実戦経験を積むことでしょうか？ 先にも言いましたが、相手は歴戦の猛者です。訓練は見ていましたし、マスターの強さは分かっています。下手すれば気付くことすら出来ずにやられてしまう可能性もあります』

「実戦経験、ね……」

レイハの言葉に苦い思い出が蘇り、思わず言葉に詰まってしまった。

実戦……命の取り合いの経験なら、ある。嫌になるくらいに。

もう関わらないって決めたんだけどなあ。

内心で愚痴るが、顔にはおくびにも出さない。レイハに、というか一人を除いては誰にも前世の記憶のことは喋っていないのだ。要らぬ心配はかけたくなかった。

ちなみにその一人というのが月村家のメイド長、ノエルさん。我ながらなんで話したのか未だによく分からないけど。

それはともかく。

「どうするの？ 実戦なんてこの世界じゃそうそう経験するものじゃないよ？」

そうそう、というか日本ならまずないだろう。表なら、という条件はつくが。とはいえ実戦経験を積むためだけに裏社会に入る気などさらさらない。

だが。

『少し、考えがあります』

珍しくも悩みながら話すレイハ。

『ジュエルシードをの暴走体と、戦ってみませんか？』

僕の、魔導師としての初戦の相手が決まった。

深夜。

人気の途絶えたビル街に、二つの影があつた。

言うまでもなく礼也たちである。

「準備はよろしいですか？」

杖を構えるリニスさん。

最初は反対していた彼女だが、レイ八の説得によって協力してくれることになった。

ちなみにユーノちゃんとフェイトちゃんには秘密だ。

「うん、いいよ」

答える僕も既に杖を手にしている。

ウチの人外じみた家族としょっちゅう為合っているので勘は衰えていないと思うが、油断する気はない。

心は鉄に。頭は機械に。

頭の奥がスツと冷える。視野が広がる。余計な力が抜けていく。

「では、いきます」

リニスさんの結界が広がり、同時にジュエルシードの在り処へ魔力流が撃ち込まれた。

魔力流を撃ち込んだ後、すぐにその場を離れる。

今回の私の役目はジュエルシードの暴走体を意図的に生み出し、主である礼也と戦わせること。

使い魔としては非常に不本意だが、レイ八の話が事実なら確かに必要ではある。

襲撃者はSランク周辺の強力なベルカの騎士四人。多少は戦える

自信があるけれど、礼也を守りながらでは難しい。荒修行でもモノになってもらわねばならなかった。

礼也の眼前で黒い歪な魔力塊が蠢きだす。

バリアジャケットを展開した、見た目だけなら天使っぽい礼也と相俟って非常に不気味だ。

思念体、だったか。それほど強い力は感じないが、初陣の相手にしては荷が勝ちすぎるのではないだろうか？

懸念を余所に魔力塊は毛玉のような形で落ち着き、その中心部に一対の紅い光が灯った。

「ご武運を……」

祈るような気持ちで呟く。

リニスは子供が好きだ。それを、自分の力不足で危険な目に合わせるのが、なんともやりきれなかった。

しかし。

「……………え？」

次の瞬間、目に入ったのはあまりに予想外の光景。

既に思念体の姿はなく、そこにいるのは杖を突き出した姿勢で止まった礼也のみ。

何が、起こったの？

『少し相手が弱すぎたようですね』

「冷静に言わないでよ。あー、びっくりした。確かに速く移動できるように、って言ったけどさ。限度があるでしょ」

呆然とする彼女の耳に入ってくる主とそのデバイスの声。

『マスターが反応できる速度の限界は把握しています。ちゃんと倒せたじゃないですか』

「倒したってどうか、衝撃波で吹っ飛ばしたみたいになったけどね。ジュエルシールドどこいったよ」

『さあ？ あ、落ちてきましたよ……あら、割れちゃってますね。マスターの突きは直撃だったようです』

「うげ、狙い通りなのはいいけど、そんなに簡単に壊れるものだ

ったのか。ユーノちゃんに何て言おう？」

『正直に言えばいいと思いますよ？ どうせ封印予定のものです。それに同じものがあと二十個ありますし』

聞こえてきた会話からすると、どうやら高速移動魔法を使って一突きで倒したらしいが……

馬鹿な。

そんな感想しか出てこない。魔法の発動を全く感知できなかった。感じたのは莫大な魔力の放出のみ。

そこまで考えてふと気付く。

もしかして、魔力に指向性を持たせて一気に放出することで爆発的に加速した？

突拍子もない考えだが、異常な魔力を持つ礼也とあのトンデモデバイスなら可能かもしれない。

それに魔法の発動を感知できなかったのも説明がつく。なんせ、魔法ですらないのだから。

「そうするかあ……リニスさん、帰ろっか」

「は、はい」

割れたジュエルシードを拾い、呑気に言う礼也。

なににせよ、礼也が無事でよかった。

そう、胸を撫で下ろした瞬間だった。

『後方に転移反応！』

「！？ 礼也、危ない！」

突如現れた人影が礼也に襲い掛かる。

ガキイイ！

「一体どこの誰さ……いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど？」

その斬撃を危なげなく受け止めた礼也に安堵するが、ちよつと機嫌が悪そう。

「くっ……！」

一撃で仕留められなかった襲撃者は悔しそうにしながら礼也から離れた。

「女の子？」

少し離れたところに着地したのは奇抜な格好をした十二、三歳ほどの黒髪の少女。

琥珀色の瞳がキツと睨んでくる。

まず目に入るのは青と白の大きな帽子だろう。

しかしそれ以上に特徴的なのが、

「ぜ、全身タイツ、だと……！？」

礼也の言葉通り。頭と手だけは出ているが、その全身を覆うのはぴっちりとした黒タイツのみ。一応申し訳程度に上着と小さなマントが肩にかかっているものの、体の前面はまるで隠れていない。

「リニスさんを超える猛者がいたとは……」

「な！？ 失礼なこと言わないでください！」

「前留めてるかどうかしかわからないじゃないか」

「そこが大事なんです！」

なんですかそのやれやれ、みたいな顔は。夜目効くんですから、バツチリ見えてますよ？

「貴様ら、バカにしているのか……？」

ちよつと無視される形になった少女がデバイスらしき細身の剣を構え直す。低い声。間違いなく怒ってます。

「いや、風俗の違いに驚いただけですよ。気を悪くしたならごめん下さい。それで、貴女は？」

それに宥めるように返す礼也。

絶対嘘ですよ。まあ、荒事にならないならそれに越したことはないですけど。

「ふん！ よく聞け、ロストロギアを狙う悪党ども！」

ありや、無理っばいですね。あきらかに勘違いしてます。聞く耳もなさそうですし。

「時空管理局執務官、クロエ・ハラオウンだ！ 貴様らの根性を

叩き直してくれろ！」

……不味いかもしれません。

十三章（後書き）

二人目のTSキャラ。名前は誤字ではありません。そして年齢で分かると思いますが、復讐は考えてないです。主人公刺したらレイ八が暴走しそうなので。モデルは有名だと思うけど、分からなくても問題ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7479y/>

僕、生きて帰ったら翠屋を継ぐんだ.....

2011年11月28日04時56分発行